シリーズ「国土教育」

交通インフラと地域の結びつきを学ぶ

日本全国をカバーする道路網、鉄道網、航路・航空路網は、わが国の経済と国民生活を支えています。交通インフラの整備で移動時間が短縮され、各地域の産業・経済・生活に大きな変化が生じています。中学校の社会科教科書は、交通インフラの重要性と地域間の結びつきについて、多くの気付きと学びの機会を与えてくれます。

中学校社会科の地理的分野の学習指導要領は「世界的視野から日本と世界との交通・通信網の発達の様子や物流を理解させるとともに、国内の交通・通信網の整備状況を取り上げ、日本と世界の結び付きや国内各地の結び付きの特色を大観させる」などとしており、全中学生は、交通インフラ整備と産業・生活への影響に関する知識を教科書から習得できます。

時間距離の短縮と交通網

中国・四国地方の地誌では、中学校社会科の地理的分野の教科書全てが「本州四国連絡橋を始めとする高速交通体系の整備とその影響」を大きなテーマに取り上げています。

本州四国連絡橋の整備とその影響

帝国書院は、中国・四国地方の交通網の発達の歴史（海上交通から陸上交通へ）／本州四国連絡橋の開通と生活環境の変化（移動時間の短縮、通勤・通学者数の増加、救急医療圏の拡大、地元商店街の売上減少、フェリー利用者の減少）／高速道路網の整備と工場立地・就労機会の創出（過疎対策）／高速道路網の整備と栽培野菜の多様化／高速道路網の整備と観光客の増加…などに6頁を割き、図表も多用して説明しています。

中部地方の産業発展と高速交通網

中部地方の地誌では、どの教科書も「産業の発展と高速交通網の整備」を主要テーマに取り上げています。

日本文教出版は、「農業についてみると、高速道路の開通によって、東海や中央高地で栽培された野菜は、大消費地である三大都市圏に出荷しやすくなり、競争力が高まりました。工業についても、三大都市圏への出荷や、ほかの工場への部品の出荷に便利な東海を中心に、新しい工場の建設が進みました。中京工業地帯や東海工業地域の発展は、自動車工業の成長に加えて、高速道路の整備が大きな役割を果たしています。中央高地の観光業も、交通網の整備に影響を受けています。新幹線や高速道路を使うことで、観光地までの所要時間が短くなり、便利になりました。いっぽう、場所によっては日帰り観光客が増え、宿泊客がのびなやむなどの課題も発生しています」と説いています。

地域間の結びつき強め産業・経済・生活に変化

川場田園プラザ

北関東自動車道への期待

関東地方の地誌で東京書籍は「埼玉県や群馬、栃木、茨城の北関東3県には、各地に工業団地が見られ、ここで生産された製品の多くは、国道などを利用して東京大都市圏や東京湾岸の貿易港に輸送されます。2011年に北関東自動車道が開通したことから、建設が進む常陸那珂港（茨城港の常陸那珂港区）を活用することにより、北関東から貿易港への輸送がおおはばに改善されます。そのため、北関東と外国との結びつきが強まると期待されています」と、開通の影響を取り上げています。

道の駅と地域連携

関東の道の駅149駅を対象に行われた「関東道の駅アワード2014」で、群馬県川場村の「川場田園プラザ」が、来訪者の調査などを元に選定委員が30駅を選んだ『プレミアム30』、一般からのWeb投票で決定するユーザー賞『みんなのNo・1』に選ばれました。

商品開発やサービス改善への関係者の努力の結果ですが、背景には「第二ふるさと」づくりを進める東京世田谷区と「職業と観光」を柱に地域交流を進める川場村との地域連携（区民健康村相互協力協定の締結＝教育出版社の教科書に掲載）や、関越自動車道整備の影響があると考えます。

交通インフラ整備と地域の個性・努力が魅力ある地方を創生

高速道路や鉄道などの交通インフラが整備されるにつれ、地域が持つポテンシャルが一層生かされます。その地に適したものを生産し、地域固有の文化・環境を生かすことで、競争力が上がるのです。交通インフラの整備とそれを生かそうとする地域・関係者のたゆまぬ努力が、魅力ある地方の創生につながるのです。**（国土学アナリスト　森田康夫）**

道の駅 点描

国道愛好家　松波成行

「朝東京駅発、好晴、八時発。梅花的れき。岐阜辺より雨になる。展望車に外国人男二人、女五人許（ばかり）」（大正4年3月19日『漱石日記』）。

東京発下関行き特別急行列車で京都に向かった夏目漱石49歳の春、人生最後の京都旅行の序文です。

東京駅は3カ月前の大正3年12月に開業したばかりの絢爛豪華な駅舎。新橋から伸びた赤煉瓦の高架軌道と併せ、明治の巨大プロジェクトの威信をかけた事業の外観は偉容を誇っていたでしょう。

しかし、真新しいプラットフォームに立った明治の文豪の筆により描写が冴えるかと思いきや、漱石の作品や記録には綺羅びやかなる記述はありません。唯一、漱石の作品では「停車場」と記していた鉄道施設が、『漱石日記』で初めて「駅」と書き留めた程度です。

日記の文章では小さな変化ながら、社会的には以後、鉄道施設は「停車場」から「駅」へと言葉も定着し、「駅」がその地域のシンボリックなランドマークへと変貌をとげていくことになります。

東京駅は本年12月で開業百周年。対する「道の駅」はまだ20年ほどながら、日本人に新たな「駅」として認知されました。その道の駅も、百年後の新たな地域のシンボルとなることへ向けて始動しています。徐々に始まった道の駅「第2ステージ」に期待しましょう。